

第2回 愛西市子育て世代包括支援センター運営協議会会議録（概要）

会 議 名	令和5年度 第2回 愛西市子育て世代包括支援センター運営協議会
開 催 日 時	令和6年1月25日（木）午後2時00分から午後3時11分まで
開 催 場 所	愛西市佐屋保健センター 2階 会議・研修室
出 席 者	別紙のとおり
欠 席 者	別紙のとおり
議 事 等	1 あいさつ 2 協議事項 （1）令和5年度事業実施状況及び令和6年度事業計画（案）について【資料番号1】【資料番号2】 （2）事業を充実していくための取り組みについて【資料番号3】 3 その他
公開／非公開の別	公開
非公開の理由	—
傍聴人の数	—
会 議 資 料	資料番号 1 令和5年度事業実施状況及び令和6年度事業計画（案） 資料番号 2 妊娠・出産から子育てまでの切れ目ない支援の展開（事業別） 資料番号 3 妊娠・出産から子育てまでの切れ目ない支援の展開（関係機関別）
審 議 経 過	別紙のとおり

愛西市子育て世代包括支援センター運営協議会委員

役 職	氏 名	備 考
委 員	塩之谷 真弓	
〃	長谷川 修三	
〃	石田 洋子	欠席
〃	谷本 紅美	
〃	水谷 紀子	
〃	原田 大栄	欠席
〃	山田 綾香	
〃	杉村 定則	
〃	野々 亜由美	代理：垣見 昌江
〃	平野 千津	
〃	鈴木 美保子	
〃	安達 和枝	
〃	中澤 アヤ子	欠席

事務局

課および役職			氏 名
健康子ども部	部 長		清水 栄利子
保健福祉部	参 事		高松 潤也
健康子ども部	子育て支援課	課長	水野 裕公
		課長補佐	佐藤 安成
		主任	麻西 志保
教 育 部	学校教育課	主幹	吉田 光男
健康子ども部	健康推進課	課長	服部 芳樹
		課長補佐	村瀬 さやか
		主査	藤松 志乃
		主事	浅井 彩乃
子育て世代包括支援センター母子コーディネーター			
健康子ども部	子育て支援課	保育士	岩間 竹子

審議経過

発言者	内容（概要）
健康推進 課長 事務局	<p>1. あいさつ</p> <p>これより設置要綱第6条1項の規定に基づき、谷本会長に議事の進行をお願いいたします。</p>
会長	<p>あいさつ</p> <p>2. 協議事項</p> <p>協議事項（1）「令和5年度事業実施状況及び令和6年度事業計画（案）について」、事務局から説明をお願いします。</p>
事務局	<p>（1）「令和5年度事業実施状況及び令和6年度事業計画（案）について」事務局より、資料番号1から2に基づき説明</p>
会長	<p>事務局の説明について、ご質問、ご意見ありますか。</p>
委員	<p>発達支援連絡会について、主催はどちらでしょうか。</p> <p>発達支援センターの他にどういった方が参加されていますか。</p>
委員	<p>主催は発達支援センターです。</p> <p>参加者は、子育て支援課と健康推進課と学校教育課で行っております。</p>
会長	<p>それでは、協議事項（2）「事業を充実していくための取り組みについて」、事務局から説明をお願いします。</p>
事務局	<p>（2）「事業を充実していくための取り組みについて」、事務局より、資料番号3に基づき説明</p>
会長	<p>ただいま、事務局から妊娠期からの地域支援の充実化と学齢期以降の学校や地域への切れ目ない支援の充実化という2つの課題を提起していただきました。まず、妊娠期からの地域支援の充実化について委員の皆様の見聞をいただきたいです。地域の支援として充実させていきたい意見がありましたら、聞かせていただきたいです。</p>
委員	<p>妊娠期からの地域支援の充実化ということで考えると、妊娠中に仕事をされている方も多く、時間を作って児童館等に行こうとなると、妊娠34週以</p>

	<p>降の産前休暇の頃が一番いいのではないかと思う。妊娠32週で電話・訪問等の時に近くの児童館や子育て支援センターなどを紹介していただく。また、妊婦にとって児童館に魅力あることがないとなかなか足を運ぶことができないと思うので、市で妊婦の支援とか産後の支援はどんなことをしているのかを知らせ、産後に向けての魅力的なことを計画していただくとよい。妊娠期から保健師と顔の見える関係作りができてくると産後にまた、この保健師に頼ればよいと思えると思う。</p>
<p>会長</p>	<p>仕事をしている妊婦が求めていることについて、具体的にどのように感じているか。</p>
<p>委員</p>	<p>育児への不安、金銭面での問題等様々な事があるが、妊娠、出産は病気ではないからといって他者を頼らない人が多い。特に愛西市は、同居されている方も多く、なかなか支援に結び付かない。みんなで支えて子育てしていくところがこれまで受けてきた教育の中でもできていないので、甘えだと思ってしまうことがある。そのため他者に頼ってもよい事を健診等の折に伝えていきたい。</p>
<p>会長</p>	<p>家族の支えは必要だと思うが、第三者に頼る必要性もあると思う。おじいちゃんおばあちゃんがいるからいいではなく、逆に家族だから頼れないとか言えない本音もあると思うので、積極的に介入していく必要があると思う。</p> <p>立田北部子育て支援センターでふたごっちクラブをやってみえるようですが、情報はありますか。</p>
<p>事務局</p>	<p>立田北部子育て支援センターでは、双子を妊娠された親御さんと双子を出産されて1～2年たった親御さんを招いた座談会で情報交換をしている。話を聞くと妊娠中から子育ての不安が大きいのということが分かった。実際に育児中のお母さんとふれあうことで育児のイメージを感じ取れたり、育児に行き詰まったら、子育て支援センターに遊びに行けばいいんだということを知ってもらう事が大切ではないか。今年度、産前から産後まで支援センターにつながったケースもあった。その方は妊娠中に親子教室に参加し、産後5か月頃から子を連れて来館された。妊娠中に子育て支援センターを知れて、すごく楽しかったと母が思えたこと、また子どもと一緒に来ようと思えたことがよかった。今後は、あいさいっ子応援ナビ等をうまく利用したり、他の発信方法を考えていきたいと話されていた。</p> <p>保健センターで実施している事業が様々あるが、母子健康手帳の交付は対象者にとっては妊娠、出産、子育てという大きなライフイベントについて考える機会になるので、切れ目ない支援の展開のスタート地点として、特に重</p>

	<p>要な機会ととらえており、しっかり話を聞き、応援プランをもとに情報提供し、継続的支援につなげている。</p> <p>面接をする中で様々な課題を感じるが、妊娠中の就労率は7割を超えており、産前の産休6週間は母にとって貴重な時間と感じている。様々な背景の中、他の子育て中の母ともつながりの希薄により孤独感を感じたり、地域の情報把握不足を課題と感じている。課題は、保健センターだけの支援では解決することが難しい。リスクの高い方だけではなく、ポピュレーションアプローチも含めた支援の展開の必要があると感じている。実際、子育て支援センターや児童館等では資料番号3で示すように乳幼児期の子育て支援や親子の居場所づくりに重要な場所・機会として利用を促しているが、どうしても産後になると慣れない場所へ出向くことの難しさやどんどころかわからないといった思いもあって利用に至らないケースもあり、地域に出向くことへの意識付けは難しい。事前につながっておくことでスムーズに利用につながったケースもあるので、妊娠期からの地域とのつながりを考えていく必要があると感じている。</p> <p>妊娠中からの地域へのつなぎとして、児童館でパパママ教室とベビーマッサージを同時開催している。その中で妊娠中のママと子育て中の親との交流会を設けており、出産前どのような準備をしたか、出産後どんどころに出かけたかなど話題にでている。夫婦で参加される方も多く、アンケートでも具体的に育児をしている父母の話が聞いて良かったという父の感想もある。パパママ教室（出産・育児編）に参加された方が、出産後ベビーマッサージに参加して今度はパパママ教室で子育ての話をするというように妊婦から子をもつ親への変わり、次の世代の方へ引き継がれている事例もある。そのため、妊娠期から児童館へ足を運べる機会はとても重要であり、今後地域の体制づくりをより整備していく必要がある。</p>
<p>会長</p>	<p>「パパママ教室」と言ってしまうと、若い方にとってはなんとなく教育されてしまうようなイメージがあり、ネーミングだけでも敷居が高いと思うのではないか。ネーミングを検討するだけの問題ではないが、足を運べるような魅力的な事業の展開を検討していただけるとよい。</p>
<p>委員</p>	<p>次に学齢期以降の地域につながることへの必要性や課題についてご意見をいただきたい。</p> <p>小学校でも切れ目ない支援を行っている。家の人困っていたら相談場所としてあいさいっ子相談室を紹介したり、発達支援センターの先生に来ていただいたりいろいろなところと連携して成り立っている。</p> <p>学校で困っていることが二つある。一つは、困り感のない親御さんの支援の方法がないこと。学校は困っている子を何とかしてあげたいと思っても親</p>

	<p>が困っていないと方法がない。理由をつけて学校へ行かせないという親がいる。子どもたちに聞けば、学校へ行きたいと言う。こういった時どこへ支援を求めればいいのか。もう一つは、不登校が年々増えていてなかなか解決できないこと。特に中学校の不登校は卒業すると支援が切れてしまう。担任が家庭訪問をして生存確認し、親と話をしている状況。大体の子は進路が無く、卒業していく。中学3年生になってから支援先を見つけるのではなくて、1, 2年生の時から先を見込んで支援につなげていくことが大事だと思うので、愛西市にそのような連携機関が生まれるとよいと思う。</p>
<p>会長</p>	<p>困り感のない親御さんへの支援、不登校の子にどこまで介入できるか。それぞれの機関で難しい課題だと思う。</p>
<p>委員</p>	<p>他の市町村との情報交換の中で、同じように困り感のない親に対しての支援が難しいという課題があがっている。学校から呼びかけをすればするほど親の方は拒否感を持ってしまい、関係性が悪くなることもある。逆に働きかけをしないと、「それでいいんだ」「何も言ってこないから楽だな」と思ってしまふ親もいる。学校には年度替わりや進路に向けてのことなどいろいろな情報を、生徒の自宅に手紙を投函している。親御さんからの返答はなかなか無いが、積極的に投函してもらい、親御さんに少しでも見てもらい少しでも学校側の“家庭を気にかけている意図”を感じてもらおう。生存確認を通して子どものいろんな気持ちを感じ取り、寄り添える気持ちがとても大切になってくると思う。子育て支援課・児童相談所を含め色々な機関と、親が今どういう状況であるのか相談という形で情報交換している。</p> <p>不登校児は増加している。増加している要因はいろいろある。学校へ行かなくても、家にいて学びを深めている子も中にはいる。市内の学校ではICTを上手に活用して校内でやっている授業を配信したものをタブレットで学んでいる子もいる。今、双方向からも発信できるように進めている。まだ、校内フリースクールといった形ではないが、学校の中に別室で居場所を設けている。ただ、人が配置されているわけではないので、先生たちが空き時間を利用して協力してやっている。子どもの特性に応じた支援という形でやっていければと思っている。不登校児の数としては改善されていないが、学ぶためにはいろいろな選択肢があるということを子どもたちや親に広められればと考えている。</p>
<p>会長</p>	<p>個人情報の管理が非常に厳しくなってきた中で、親が望まないのに学校が子どもの情報を他の機関に相談することは難しいと思うのだがどうでしょうか。</p>

委員	<p>関係機関には学校からではなく地域の情報として提供し、介入していくという方法もある。</p>
会長	<p>地域の方の力を借りて関係機関に伝えていく。地域の支援も含め、各機関がどのような役割をしていくのか、また青年期まで地域としてつながる先についてご意見をいただきたい。</p>
委員	<p>ネットワークの中では調整役が必要になる。愛西市は保健センターや子育て支援課、あいさいっ子相談室等の機関がかなり充実している。しかし学童期に入るとつながりが細くなり、中学・高校期になるともっと細くなり、青年期になると先が見えない状態。今子どもが置かれている状態や子どもの基本理解をどのようにしていくか考えていけないといけない。親の状況から勝手に子どもの姿をイメージしている可能性がある。まず1点目は、コロナで教育環境、母子環境を含めて子どもたちに大きなダメージがあるということ。2点目は逆境的小児期体験（小児期における被虐待や機能不全家族との生活による困難な体験）を妊娠期・乳幼児期・学齢期・青年期に体験をした子どもたちが青年期にどんな姿を見せるかということ。心と体、あるいは脳機能に大きなダメージがあることがはっきりわかってきた。逆境の体験は10の逆境に分類され、青年期にどのような影響を与えるかを考える手掛かりとなる。例えば青年期には若年性糖尿病の中には逆境の体験が関わっているものもあると指摘されている。つまり青年期の姿から妊娠期へさかのぼりながらケースをみていく必要がある。青年期の子ども達がこれまで体験してきたつらい出来事をきっちりと知ること。中学校期、小学校期、乳幼児期、妊娠期とさかのぼることにより、ネットワークを構築していく事が必要である。</p> <p>NPOの引きこもりの会で19才の時に会った方に久々に会ったら、28歳になっていた。乳幼児期のこと、不登校となった頃のこと、家の状況から今の状況まで聞いた。今は就労継続支援B型で頑張っているが、友だち関係、恋人関係で大きな挫折をしている。この子の今までの支援を見ていくといつどんな支援がされたのだろう、どんなネットワークの中で機関がどう働きかけたのかと疑問に思った。逆境的小児期体験はどの時期にどう支援したらよかったかを考えるきっかけとなる。母子支援の大切さは環境的な要因にどう切り込むかということ。一人の頼りになる大人と出会うこと、また出会える仕組みをつくっていかねばいけない。その調整役として、相談員とは別の間に入る人が必要。SSW（スクールソーシャルワーカー）が全て解決するわけではないが、ぜひSSWの役割を担う人員を配置してほしい。どの時期に子どもの様子に気づくのか、どこが支えられるのか、どこでつなげるのか、そして新しい仕組みとして何が必要かという視点が大切。</p>

<p>会長</p>	<p>お子さんからの発信が無く、母からの情報のみで関わっていたネグレクトのケースで、生死に関わる一歩手前で救えたケースを経験した。関係機関とケース検討会をしてどの時点でどんなところを見失っていたのかを検討した。学校からの情報はすごく大切に、子どもの情報を得ようとするとうすることがよいのか。</p>
<p>委員</p>	<p>母子支援を考えた際、医療との関係でネグレクトの困難事例の母について精神科の医師は「できる限り子どもと関わることをやめなさい。」とアドバイスをした。母は食事などの世話をするだけで、子どもと関わるのは褒める時だけにして、あとは母以外の方が子どもに関わる。母はショックだったと思うが、逆境的体験の中で、今までとはまた違う母子支援の視点がある。学校情報は、とても大事でそれをどう生かしていくかが問題である。学校情報が医療や他の関係機関ときちんと重なり合うといいと思う。</p>
<p>会長</p>	<p>子どもと関わるなというのは母子分離ということですね。</p>
<p>委員</p>	<p>それ以上傷つけ合わないよということですよ。</p>
<p>会長</p>	<p>学校の先生方も悩んでいるケースが多く、どこに相談したらよいかわからない。地域の声として関係機関につなげていき、行政とともに積極的に関わっていく風通しの良さが大事ではないかと思う。決して親御さんだけがSOSを出しているのではなく、子どもがしっかりとSOSを出していることをしっかり把握していかなければならない。</p> <p>発達支援センターでは地域で発達に課題を抱えている家庭を支援していただいています。ぜひ現状を教えてください。</p>
<p>委員</p>	<p>発達支援センターでは、発達にデコボコや遅れが心配される就学前のお子さんの支援を行ってきた。また保育所等訪問支援事業と相談支援事業を一昨年の10月から始めている。保育所等訪問支援事業として児童福祉センターと同様に福祉サービスにおける受給者証を持っている方に対して保護者の希望を受けて契約を結び、各園や学校に出向いて子どもの行動観察や分析をし、保護者にアドバイスを行っている。まだ始めたばかりで、皆様にこの事業について広く知っていただくことと発達支援センターと園や学校と信頼関係を築くことが重要と考えている。今年度、多数の幼稚園・保育園・こども園・学校に出向いて先生の意見を聞き、訪問した様子や状況等を保護者に報告している。学校に関しては、コーディネーターが出向き、保護者の意見を基に情報を整理して学校と連携している。</p>

相談支援事業は障害のある方が自立した日常生活または社会生活を営むことができるよう一緒に考えていく事業。必要な障害福祉サービスにつなげる支援や関係機関との連絡調整も行っており、成人までを対象としている。次年度についても改正児童福祉法の施行によって発達支援センターが地域の障害児支援の中核的役割を持つことが4つ明確化されている。一つ目に幅広い専門性に基づく発達支援・家族支援、二つ目に地域の障害児通所支援事業に対するスーパーバイズコンサルテーション機能、三つ目として地域のインクルージョン推進の中核としての機能、四つ目として地域の障害児の発達支援の入口としての相談機能ということが挙げられている。準備段階として、学校への巡回事業や支援者向けの研修会等を発達支援センターで行った。お子さんの理解や支援の仕方について専門職が助言等を行う巡回訪問支援事業を実施できるよう準備を進めている。加えて地域の事業所との関係づくりや、発達支援の入り口として相談が受けられる体制を充実させたいと考えている。地域と連携していく中で見えてきた課題として、関係機関間で気軽に相談し合える人間関係、子に対する切れ目ない支援体制がある。センターでは今年度より発達支援連絡会を設置し、子育て支援課・学校教育課・健康推進課と連携している。来年度は、子に対する多角的な視点からの支援方針を検討できる会議にしたいと考え、支援を必要とする子どもたちが切れ目なく支援が受けられるよう地域の関係機関と連携し、専門的な後方支援が行える体制を築いていきたいと考えている。

委員

まず一点目は、妊娠期からの地域支援に対する課題について。魅力的で足を運びやすいとは、どんなものだろうと考えた時、広島の拠点的役割を持つ保育園を思い出した。保育園の玄関先に「妊娠中から遊びに来てください」「妊娠中から誰でも自由にきてね」と書いて掲示してあった。中に入って行くと相談もウエルカムであり、小さなお子さんをお持ちの方もご自由にどうぞと宣伝がしてあり、教室の開催案内などで情報がいっぱい貼ってあった。お母さんたちも「来ていいよ」と書いてあることに驚き、こうやって宣伝することもいいなと思った。今はお役立ちグッズが充実しているが、何を買ったらよいかわからない人もいると思う。お役立ちグッズ紹介会みたいなものがあり、安く買える情報や、施しではなく、いらなくなった服がもらえるというのもあるといいと思う。コラボ事業は集まったお母さんとお母さんをつなぎ、地域の中で友だちを広げていく機会であり、よい仕掛けを考えていく必要がある。二点目は、学校や地域への切れ目ない支援の充実。それぞれのケースには、いろいろな人が介入している。それでも親は拒否する。振り返りの事例検討は誰かを責めるのではなく、今後に活かすことができる。どこがチャンスの時で、その時どうだったのだろうと考えながら、小さなところまで振り返ることができた。青年期の場合だと就労支援の事務所とコラボを

<p>会長</p>	<p>してみるとか、親の会などに関わって、いろいろな人とつながっていくとよいと思う。これからの愛西市に期待している。</p> <p>一つ一つのケースをきちんと検討していただき、一つずつ考えて必ず次につなげていく。そういった作業が大切だとつくづく感じた。保護者から発信があれば支援できるが発信がないケースをいかに拾い上げて子どもたちを救っていくかということとはとても大きな課題だと思う。ぜひ、委員の皆様方の知恵を拝借して検討し、支援の方法を考えていきたいと思う。</p> <p>これにて協議を終わらせていただきます。</p>
<p>事務局</p>	<p>3 その他について</p> <p>令和6年度こども家庭センターの設置予定について説明。</p>
<p>委員</p>	<p>国がやってきた施策の一番の理由は児童福祉と母子保健の連携だと思う。住民の方目線で住民がわかりやすい、住民が愛西市で子育てできて良かったなど思ってもらえるような仕組みになれば国の方ではなく住民の方を向いて動いていると強く思った。</p> <p>閉会</p>